

□ 平成21年度 第3回 図書館・文学館分科会 議事録要旨

日時	平成22年(2010年) 1月20日(水) 18:00~20:30
場所	荒川区役所4階 庁議室
出席者	〔委員〕 柳田邦男分科会長、山崎一穎副分科会長、 齊藤泰紀委員、並木一元委員、戸田光昭委員、横山幸次委員、 興野愛子委員、北川嘉昭委員、友塚克美委員、藤田満幸委員 〔事務局〕 飯田昌宏 総務企画課特命担当課長、 佐藤泰祥 社会教育課長兼文学館調査担当課長、 北村美紀子 南千住図書館長、坂入康弘係長、吉野友博係長、 水野裕都係長、須田具子、石原久美江

1 分科会長挨拶

2 分科会の進め方について

3 議事

(1) 資料の説明

- ・(仮称)吉村昭記念文学館基本構想の内容
- ・展示基本計画の内容
- ・今後の課題

(2) 意見交換

- ・吉村記念文学館が将来にわたり活動を続けていき、区民に愛着を持って支持されていくポイントはどこにあるのか。年月と共にしりつぼみにならないようにするのはどうしたらいいか。
- ・常設展示には可変性はあまり持たせず、残りの2/3(準常設展・企画展)の展示空間には可変性を持たせた展示を実現していきたい。
- ・吉村昭記念文学館のテーマの切り口は何か。
⇒吉村文学の特色の記録性に着目し、作品をテーマにした様々な展示ができるのではないか。
作家のメインテーマに関連を持たせ幅広く様々な展示テーマを今後考えていくべき(色々な作家が同じテーマをどう表現しているのか。吉村昭と同時代の作家など)。
- ・区の文学館の学芸員体制(3名)で展示基本計画のことをやるには難しいので、各地の関連セクションとも連携を図りながら、今まで既存の文学館がやらなかったソフト的な活動を重要視してやっていく。
- ・荒川区では今回の中央館的規模の大きな図書館と連携を図り、具体的に文学館の活動をしていくことが課題でもある。
- ・3人の学芸員でこれだけ大きな事業展開を頭脳(ブレイン)として対応するのは難しいのでは。
- ・吉村作品は記録文学的要素が強い。吉村さんは資料に忠実に書いているがそのことの意味は何

かを問いかけていくべき。

- (仮称) 吉村昭記念文学館基本構想の「教育・普及」が引っ掛かる。
 - ⇒文学館の場合は「教育」ではなく「学び」なのではないか。
 - ⇒文学館はそこへ行き読み、読んだものの背景をどう理解するか、作家の思いやテーマを学んでいくもの。
 - ⇒吉村文学で学ぶのは時代に応じたその時生きた人たちを現場で体験的に学んでいくことが大事。
- 現場と現物の見方、現場に立つ、行くことの大切さ、面白さ(『高熱隧道』=仕事への情熱・『戦艦武蔵』=戦史研究・『桜田門外の変』=時代・水戸など)、このような活動を考えると単なる展示では終らないダイナミックなことができる。
- 吉村さんが他の歴史小説家と違うのは写真と記録テープが膨大にあり、これがまさに現場の声。
 - ⇒吉村さんは資料をみながら同時にもう1回現場へ行きインタビューし写真を撮る。
 - ⇒そういう意味で「教育」ではなく「学び・学習の場」などに文章を書き改めることで基本構想を生かしていきたい。
- 作家の生原稿は面白いが、それは専門家が見て面白いのであって、一般の人は面白くない。やはり今の若い人達は映像なので、映像でどうやって誘い込み、文字・本に引っ張っていくか。
 - ⇒今の中学生はマンガで源氏物語を読んでいる。そうであるならばマンガから入ることを止めない方が良いと思う。そうするともう少し映像化にもなるのでは。
- 時代の目まぐるしい変化の中で、スタティック(static/静的な・定位の)に飾っているだけでは人が来なくなる。それをどう新しい展開にするかが吉村記念館のひとつの命題である。
- 展示基本計画を見ると展示の仕方が非常に難しい。文学館・記念館はどこを見ても、もう一度来ようという気にならない。ならば「二度来るとはそうはない」ということをスタートにしてはどうか？
- 「記録文学」をどう前面に出すのか？ 荒川区民だけが対象ではなく全国の方を対象にし吉村ファンが堪えられるものにする。ファンが1回来て終わりではなく、もう一度来て何か手伝えないか、何か一緒にやれないかなどという所が、展示基本計画からはピンと来ない。吉村昭記念文学館のやり方を通し媚びないで欲しい。
- 吉村先生の特徴は記録的なもの、歴史小説、現代小説、戦争文学もあるので展示基本計画では網羅的になっている。
 - ⇒分科会長は第3者の目で見ると吉村昭の特徴を一言で記録文学だと。
 - ⇒吉村さんの編集者たちは関わった担当で特色が違って来る。
 - ⇒吉村特色は色々あるがまとめないといけないので、関係者は苦渋の思いでこの形にした。
- 媚びないでやった例が津和野の森鷗外記念館だが、その代わりに入館者4万人、専門家しか見ない。これが現実だが現場はプライドを持ち腹を決め講演会に40人しか来なくても、そこから生まれれば良いと思ってやっているのだから「入場者は何人だ」など言わないで欲しい。
- この展示基本計画の中にある展示ローテーションはすごく良い。これをやるのは大変だろうが、(この計画通り)ここまでできたらリピーター・区民の方も来ていただきやすいだろう。
- このような計画をやるには絶えず二面性を、軍事用語でいう二正面作戦が必要。荒川区という

選挙区で人気を集めることと全国区で票を集める。両方を持っていないといけない。

⇒企画展をやる時に少し大胆に人を集めるテーマを考える。

例えば「吉村昭と零戦」(←素材がたくさんある)

「吉村昭 桜田門外に立つ」(←今の時代の政変を忍ばせる感じ)

「吉村昭と戦史」(←文学と戦争の問題を説く) など。

⇒アイデアマンがダイナミックにやると文学記念館だけど絶えずその文学者なり作品の現代的意味なり今なぜそれが問われるのかということも見えてくる。それを荒川区選挙区と全国区選挙区と両方やらないと年間5万とか10万の人は集まらない。

- 文化は数字で評価してはいけないと思っているが、やるからには良いものを、少しでも多くの人に見て来て欲しいし、吉村文学に興味が無くても零戦に惹かれて行ったら、良い所で印象を良く持ってもらえれば、荒川区は東京の場末ではなく文化の豊かな所だというイメージになる。
- 数字を気にすることはないと思うが、素人代表として言わせてもらおうと、小学生では吉村昭さんは読まないと思う。ただリピーターを考えると来てもらわないと困る。
- 荒川区選挙区から攻めると区内の子どもには動くもの、色彩で捉えるようにする。
- 子どもの時に吉村さんを見せて自分と関連した興味を見つける(戦艦武蔵・荒川の地名・日暮里)ことが必要。
⇒色々な所に行き見てきて、自分に関連があり何か知っている、動くもの、色彩が記憶に残っているので、そういったものが欲しい。
- 福井県敦賀市の杉原千畝さんの資料館に行ってきた。立ち上げから今日に至るまでずっと携わってきた人に話を聞いてきた。
 - *コンセプトは学び・教育・敦賀市との接点などでスタートし、教育委員会をベースに近隣県に働きかけたが、思ったほど参加する人が少ない。
 - *思い切って観光・越前ガニの視点を取り入れたら、かなり反響があった。
 - *バスで連れてくると当初は考えていなかったトイレの問題、食事をする場所など今度は対応ができなくなった。
 - *発想の転換でそうはしたが、対応するために建てて間もないので建替えをするわけにもいかず、原点に戻ってどうしたら良いか考えている。
 - *実際に予想をしていないことが出てきたのは、①訪問・聞き取り調査をしたら膨大な資料が出てきて、この(資料館の)規模では対応できない②観光とういことでどっと来られても対応できない問題とで悩んでいるとのこと。
- 敦賀市の話を聞いて、文学館はどういう目的でつくるのか。吉村昭という方・荒川区との接点を通して文学を次世代の子ども達に知らせていくのか。
⇒作ったものに対して費用対効果はどうなんだということではなく、この計画を進めていかないといけない。
⇒苦慮する点ではあるが当初決めたものをあまり変えるのも如何なものか。
- 吉村さんご自身は文学館単独ではなく図書館と併設ならという思いが強かったので、その意思を生かした上で、複合館の中で図書館との連携がカギになるのではないかと。
⇒図書館を通じて文学館へ、またその逆の流れを作っていく。
- 膨大な資料や寄贈されたものをたくさん保管しているわけだから、収蔵機能と研究機能の2つがないと専門的な部分も一般的な部分も文学館としてこなしていけない。
- 展示企画を進める上で専門的な学芸員がどのようにやっていくのか。

⇒人・体制の問題。
⇒図書館の流れにも繋がる。

- ・学芸員が全部をできるわけがないがやり方を考える。
⇒例えば監修者を入れ、色々なアイデアをもらう。
- ・これはできてからのソフトの話だが、誰が企画者か、企画者の問題。
⇒「○○(例・著名人)企画 吉村昭と××展」は言葉悪く聞こえるが客寄せには有効。
- ・この計画については研究費・資料収集費は毎年これだけ必要だということを向こう 10 年間くらい、最初から謳ってみてはどうか。それが足枷にもなる。
- ・企画展のための設備の中で固定的に作るのではなく、固定するとすぐに飽きるので広い舞台の中で大道具はいつでも変えられる、自由にできる設計はすごく大事。
- ・学芸員の専攻とは関係なく、頭の中をダイナミックに、民俗や美術が専攻であろうとこの吉村記念館に対応できる学芸員になるように勉強していくことが必要。
- ・これまでの話を聞いて、今後も委員の先生方のお知恵をお借りするためのアドバイザリー委員会のような仕組みをつくり施設の計画の段階だけでなく、運営の段階でも機能させていけるように考えたい。
- ・区民に限らず全国展開していくならインターネット時代なので、企画案などを寄せてもらったり、資料収集等も全国展開の中でマニアックな人から外部の研究者から加わっていただき、活用させていただくような仕組みをつくり、フレキシブルな組織をつくるというイメージを持っている。
- ・事実上、作りましようと思った段階からホームページを立ち上げて欲しい。
⇒今から準備し全国に発信しなくてはいけない。
⇒関心をもってもらうためにも、色々な写真を駆使し、様々な紹介をして欲しい。

- 4 今後の予定について 〈佐藤文学館調査担当課長〉
- * 2月16日(火) 第4回 図書館・文学館分科会 18:30～ 庁議室
 - * 2月23日(火) 複合施設の設置及び運営に関する懇談会(親会) 19:00～ 庁議室